

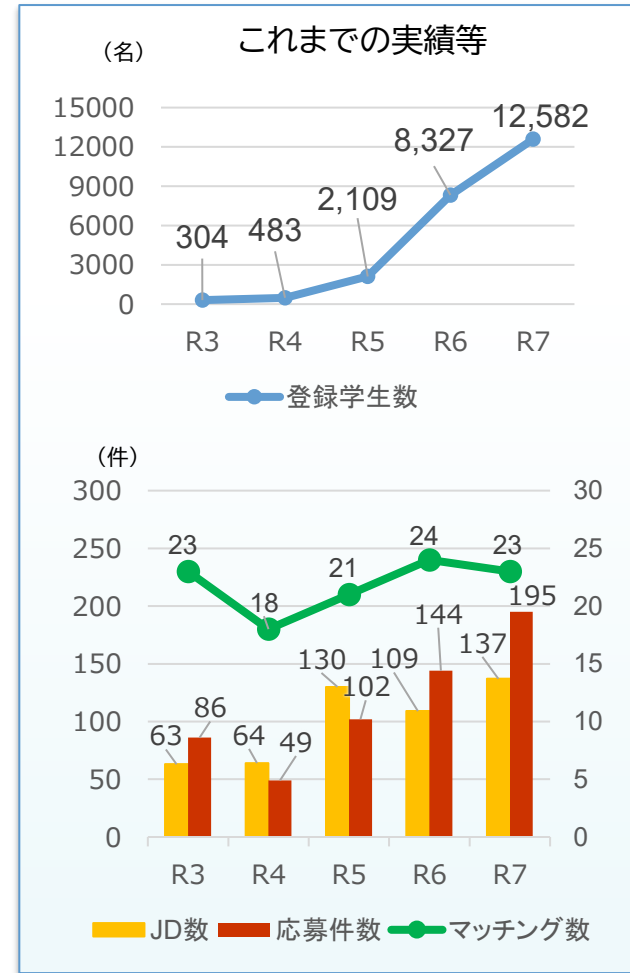
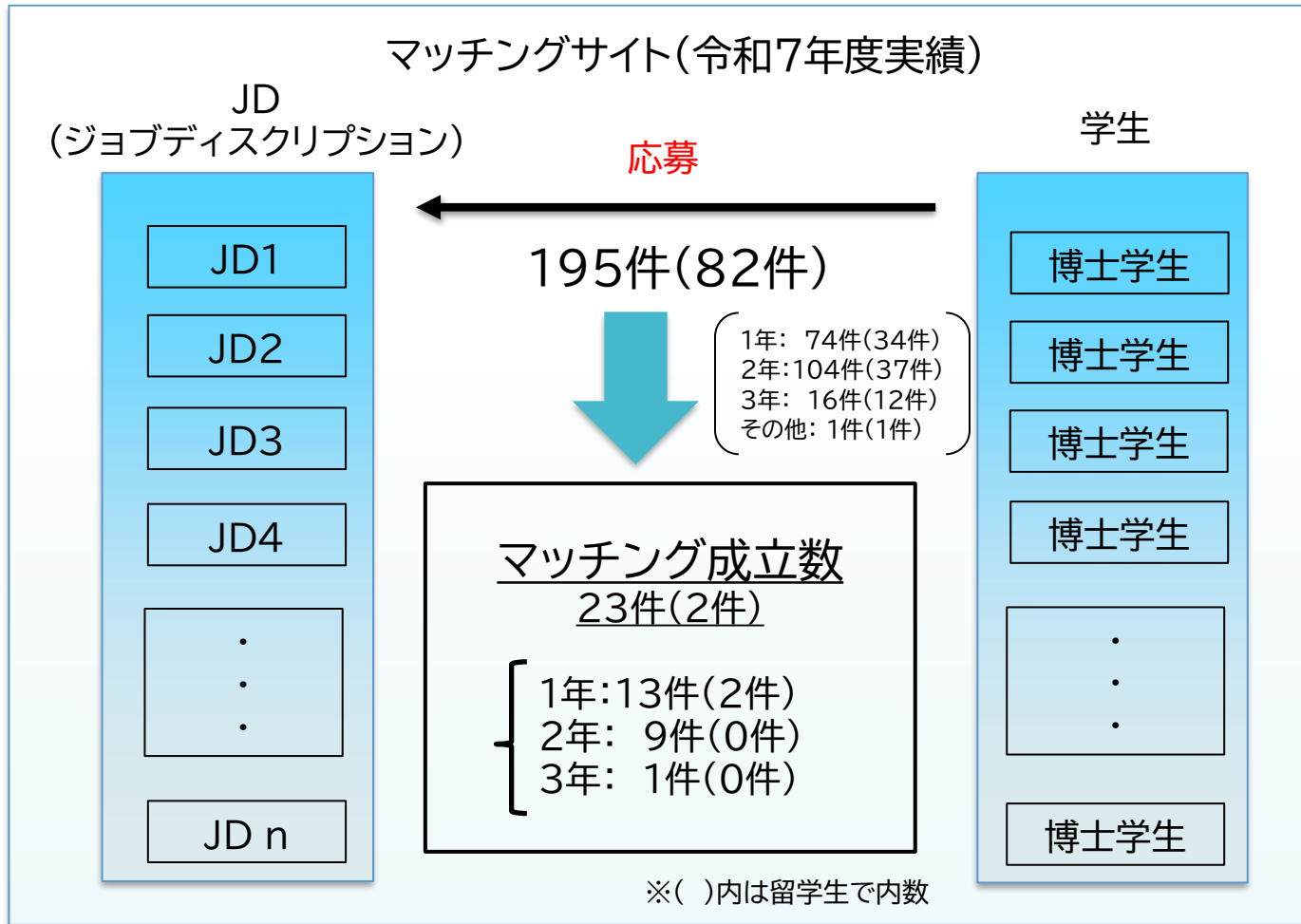
資料1

ジョブ型研究インターンシップ推進委員会(第8回)  
令和8年1月16日(金)

ジョブ型研究インターンシップ  
令和7年度取組状況について  
(令和7年12月末時点)

# ジョブ型研究インターンシップ実績

※本資料の令和7年度実績は令和7年12月末時点



提示・募集 22社 137JD (募集人員251名)

会員企業74社

学生情報登録 12,582名 (留学生 5,173名)

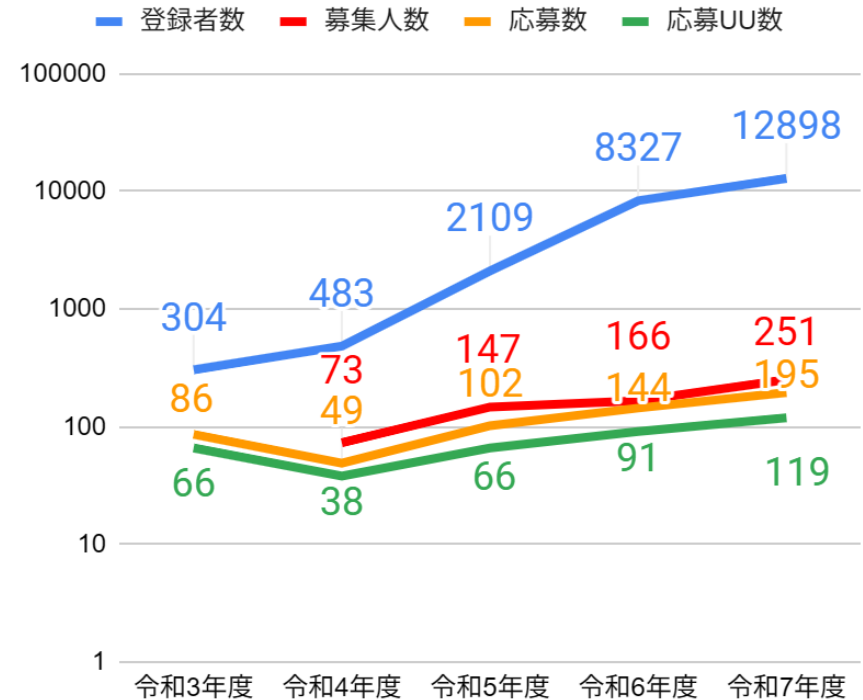
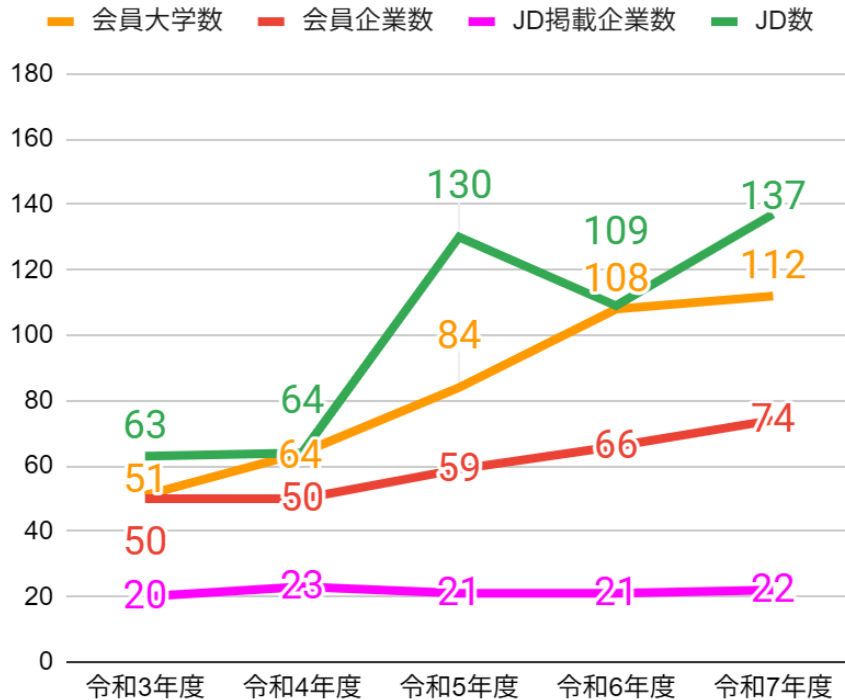
会員大学112大学

1年: 3,475名 [27.7%]  
2年: 3,502名 [27.9%]  
3年: 2,880名 [22.9%]  
その他: 2,705名 [21.5%]

学生情報登録

# ジョブ型研究インターンシップ 実績（推移）

- ◆ 会員企業数は増加傾向であるが、JD掲載企業数は横ばい（JD数は着実に増加）。
- ◆ 学生の登録者数は大きく増加しており、応募数も着実に増加。



（令和7年度は令和7年12月末時点）

（注）令和6年度のJD数および募集人数について重複計上されていることが判明し、昨年度の資料から数値を修正（JD数：154→109、募集人数：323→166）しています。

# 会員企業一覧

74社(令和7年12月22日現在)

※            は令和7年度新規会員企業

企業名
株式会社アカリク
旭化成株式会社
アサヒクオリティードイノベーションズ株式会社
株式会社INPEX
株式会社ウフル
株式会社エア・リキード・ラボラトリーズ
AGC株式会社
SK弁理士法人
株式会社EduLab
エリクソン・ジャパン株式会社
LSAS Tec株式会社
沖電気工業株式会社
花王株式会社研究開発部門
川研ファインケミカル株式会社
キヤノン株式会社
京セラ株式会社
キリンホールディングス株式会社
株式会社QunaSys
KHネオケム株式会社
一般社団法人構造物診断技術研究会
株式会社 神戸製鋼所
コニカミノルタ株式会社
株式会社サイバーエージェント
株式会社サタケ
株式会社サムスン日本研究所

企業名
JX金属株式会社
塩野義製薬株式会社
株式会社島津製作所
シャープ株式会社
昭和電線ホールディングス株式会社
株式会社人機一体
住友化学株式会社
住友ベークライト株式会社
セントラル硝子株式会社
ソフトバンク株式会社
第一生命保険株式会社
第一三共株式会社
ダイキン工業株式会社
株式会社ダイセル
武田薬品工業株式会社
中外製薬株式会社
株式会社データシード
TDK株式会社
株式会社デンソー
東亜合成株式会社
東京大学協創プラットフォーム開発株式会社
東レ株式会社
トヨタ自動車株式会社
日鉄ソリューションズ株式会社
日東紡績株式会社

企業名
日本イー・エス・エム株式会社
日本電信電話株式会社
日本特殊陶業株式会社
日本ガイシ株式会社
パナソニック株式会社
株式会社日立製作所
Beyond Next Ventures株式会社
富士通株式会社
Plug and Play Japan株式会社
株式会社プリチストン
株式会社Proxima Technology
三井化学株式会社
三井住友海上火災保険株式会社
三井住友信託銀行株式会社
三井不動産株式会社
三菱ケミカル株式会社
三菱電機株式会社
三菱マテリアル株式会社
三菱UFJ信託銀行株式会社
株式会社みずほフィナンシャルグループ
株式会社メルカリ
有限会社モールドモデル
株式会社Ridge-i
国立研究開発法人量子科学技術研究開発機構

# 会員大学一覧

## 112大学(令和7年12月22日現在)

※          は令和7年度新規会員大学

大学名
北海道大学
室蘭工業大学
弘前大学
東北大学
秋田大学
山形大学
福島大学
茨城大学
筑波大学
宇都宮大学
群馬大学
埼玉大学
千葉大学
千葉商科大学
東京大学
東京科学大学
東京外国語大学
お茶の水女子大学
東京農工大学
電気通信大学
一橋大学
東京海洋大学
横浜国立大学
総合研究大学院大学
新潟大学
長岡技術科学大学
富山大学
金沢大学

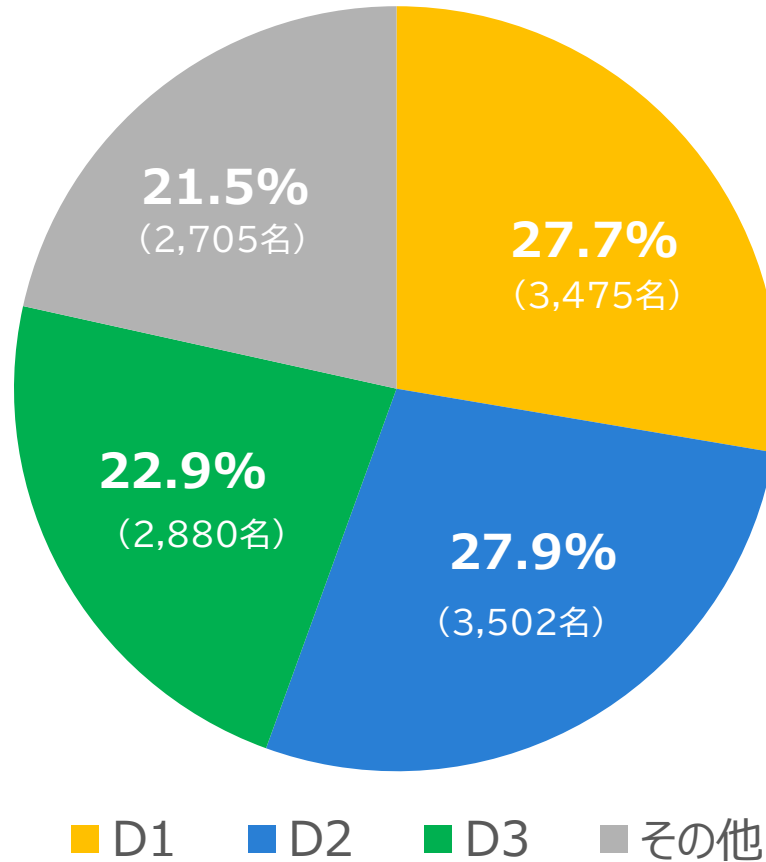
大学名
北陸先端科学技術大学院大学
福井大学
山梨大学
信州大学
岐阜大学
静岡大学
名古屋大学
名古屋工業大学
豊橋技術科学大学
三重大学
滋賀大学
京都大学
京都工芸繊維大学
大阪大学
神戸大学
奈良女子大学
奈良先端科学技術大学院大学
和歌山大学
鳥取大学
島根大学
岡山大学
広島大学
山口大学
徳島大学
香川大学
愛媛大学
高知大学
九州工業大学

大学名
九州大学
佐賀大学
長崎大学
熊本大学
大分大学
宮崎大学
鹿児島大学
鹿屋体育大学
東京都立大学
横浜市立大学
富山県立大学
岐阜薬科大学
静岡県立大学
名古屋市立大学
京都府立医科大学
大阪公立大学
兵庫県立大学
広島市立大学
北九州市立大学
自治医科大学
青山学院大学
学習院大学
慶應義塾大学
芝浦工業大学
順天堂大学
上智大学
中央大学
東海大学

大学名
東京電機大学
東京農業大学
東京薬科大学
東京理科大学
東洋大学
星薬科大学
東京都市大学
明治大学
早稲田大学
創価大学
新潟医療福祉大学
金沢工業大学
中京大学大学院工学研究科
名城大学
中部大学
藤田医科大学
京都産業大学
同志社大学
立命館大学
関西大学
近畿大学
甲南大学
神戸薬科大学
関西学院大学大学院理工学研究科
岡山理科大学
福岡工業大学工学研究科
琉球大学
沖縄科学技術大学院大学

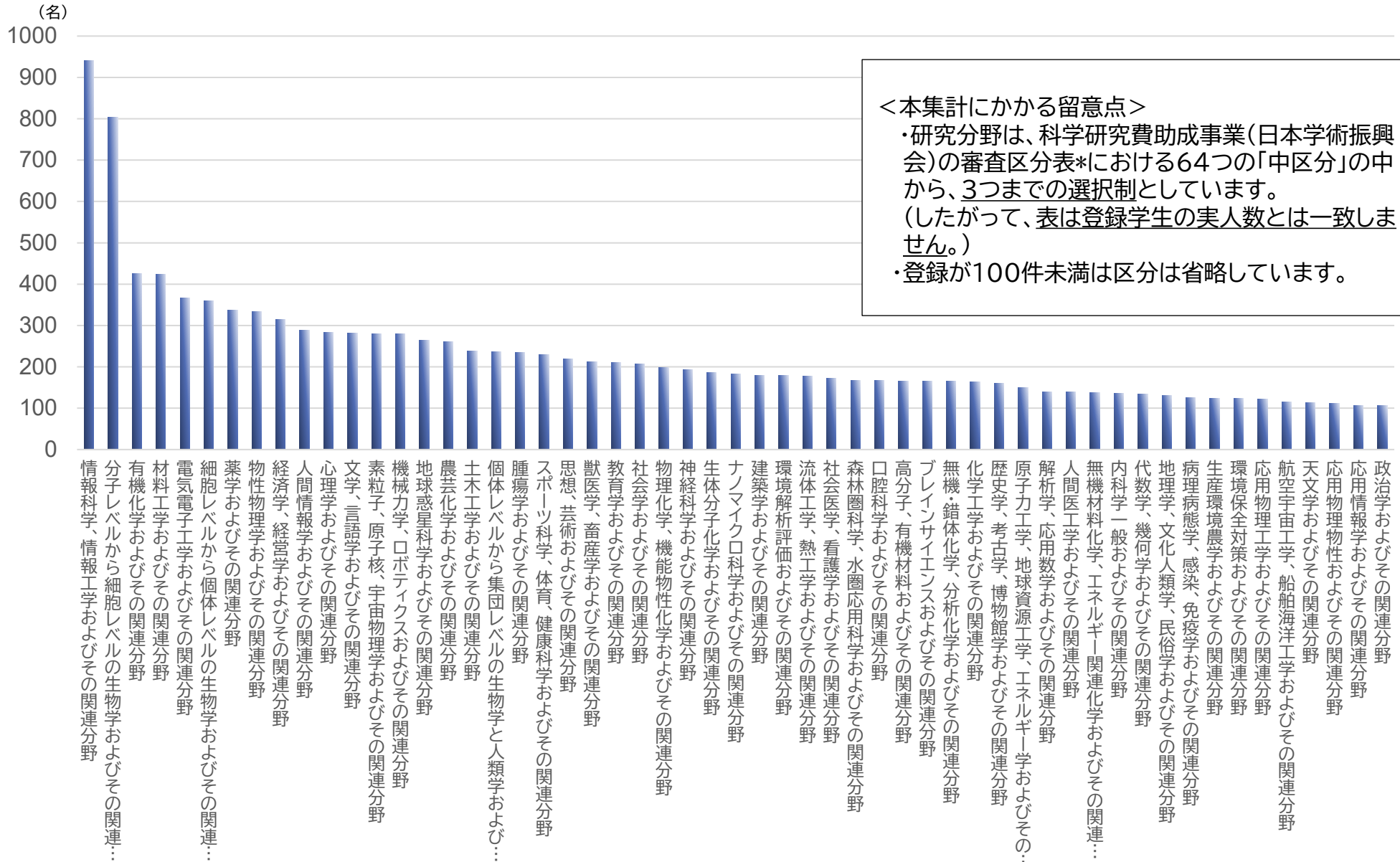
## 令和7年度 登録学生の傾向(学年割合)

- ◆ 登録学生において、D1とD2の学生で5割以上を占める。



(注) 「その他」については、一部修了・退学学生のアカウントが残っていること、D4以降の在籍の可能性もあることから、学生の登録情報をそのまま計上。なお、年度末や年度初めに各大学で明らかに修了している学生のアカウントを利用解除することを促し、精査する予定。

# 令和7年度 登録学生の傾向(研究分野)

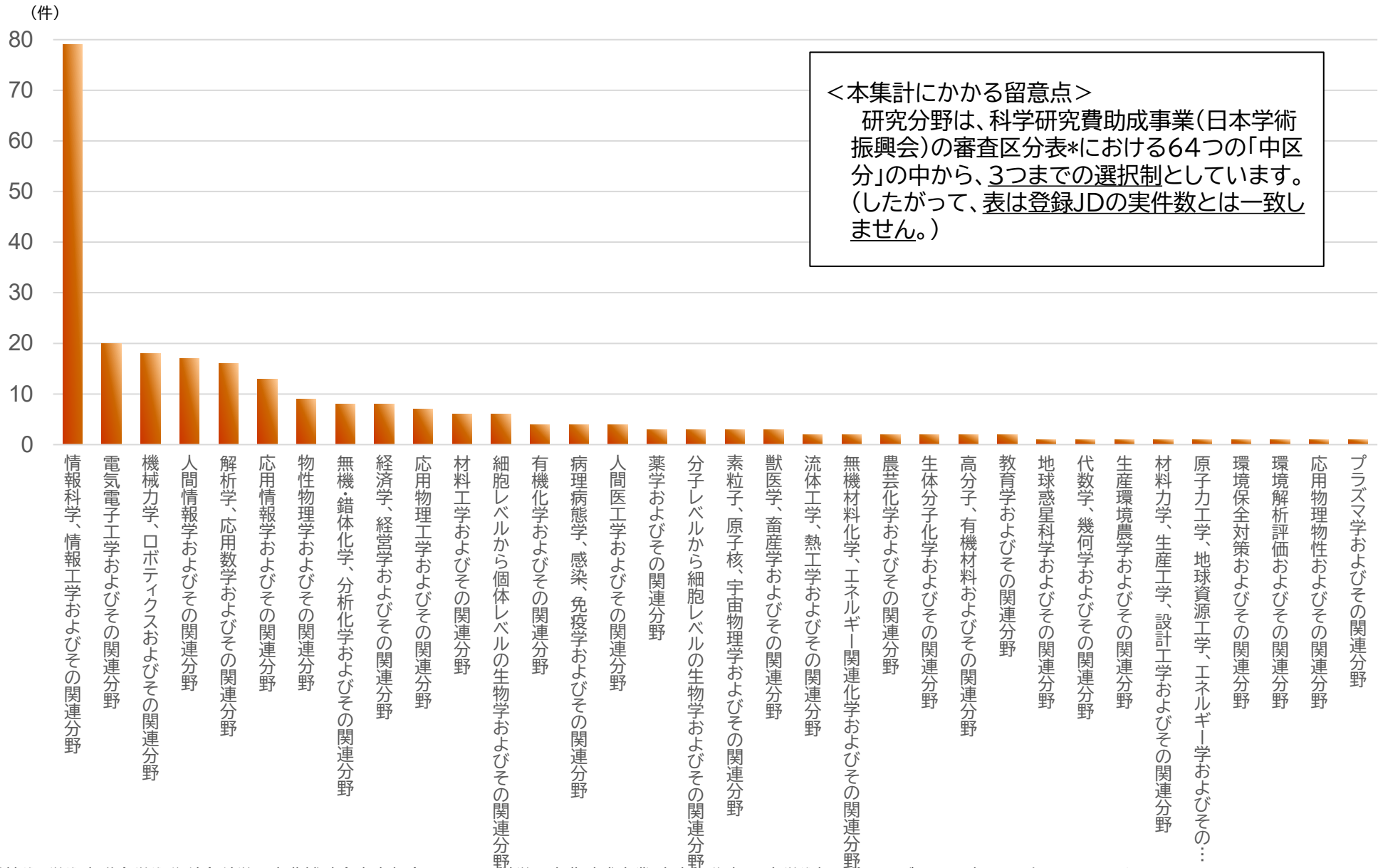


＜本集計にかかる留意点＞

- ・研究分野は、科学研究費助成事業(日本学術振興会)の審査区分表\*における64つの「中区分」の中から、3つまでの選択制としています。(したがって、表は登録学生の実人数とは一致しません。)
- ・登録が100件未満は区分は省略しています。

\*科学技術・学術審議会学術分科会科学研究費補助金審査部会, 2024, 科学研究費助成事業 審査区分表, 日本学術振興会ウェブサイト, (2025年2月5日取得, [https://www.jsps.go.jp/j-grantsinaid/02\\_koubo/shinsakubun.html](https://www.jsps.go.jp/j-grantsinaid/02_koubo/shinsakubun.html))

# 令和7年度 登録JDの傾向(研究分野)



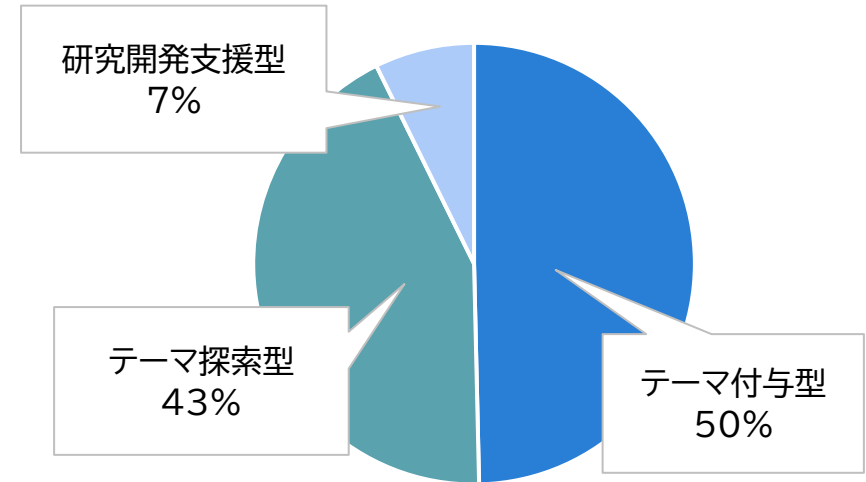
＜本集計にかかる留意点＞  
 研究分野は、科学研究費助成事業(日本学術振興会)の審査区分表\*における64つの「中区分」の中から、3つまでの選択制としています。  
 (したがって、表は登録JDの実件数とは一致しません。)

\*科学技術・学術審議会学術分科会科学研究費補助金審査部会, 2024, 科学研究費助成事業 審査区分表, 日本学術振興会ウェブサイト, (2025年2月5日取得, [https://www.jsps.go.jp/j-grantsinaid/02\\_koubo/shinsakubun.html](https://www.jsps.go.jp/j-grantsinaid/02_koubo/shinsakubun.html))

# 令和7年度 登録JDの傾向(類型・期間)

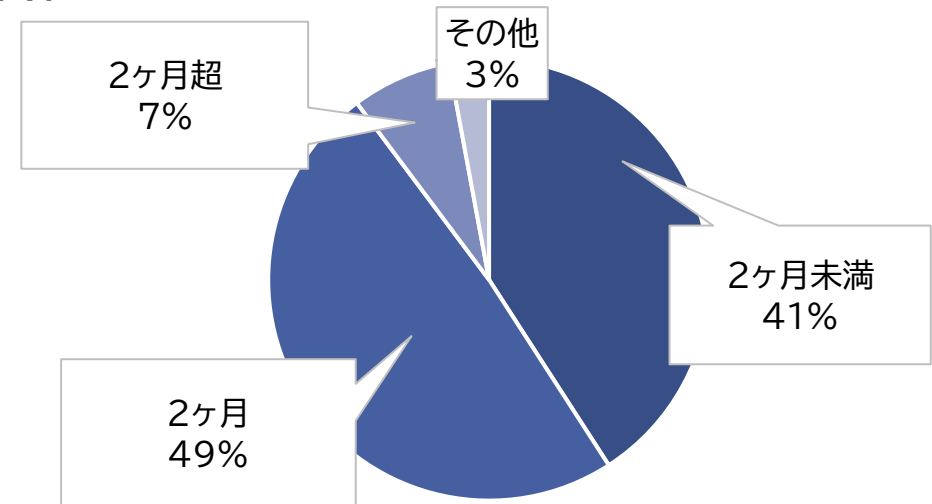
## ●登録JDのインターンシップ類型別割合

- ◆「テーマ付与型」と「テーマ探索型」の割合は拮抗している。
- ◆「研究開発支援型」が顕著に少ない。



## ●登録JDの実施期間別割合(グラフは下限を集計)

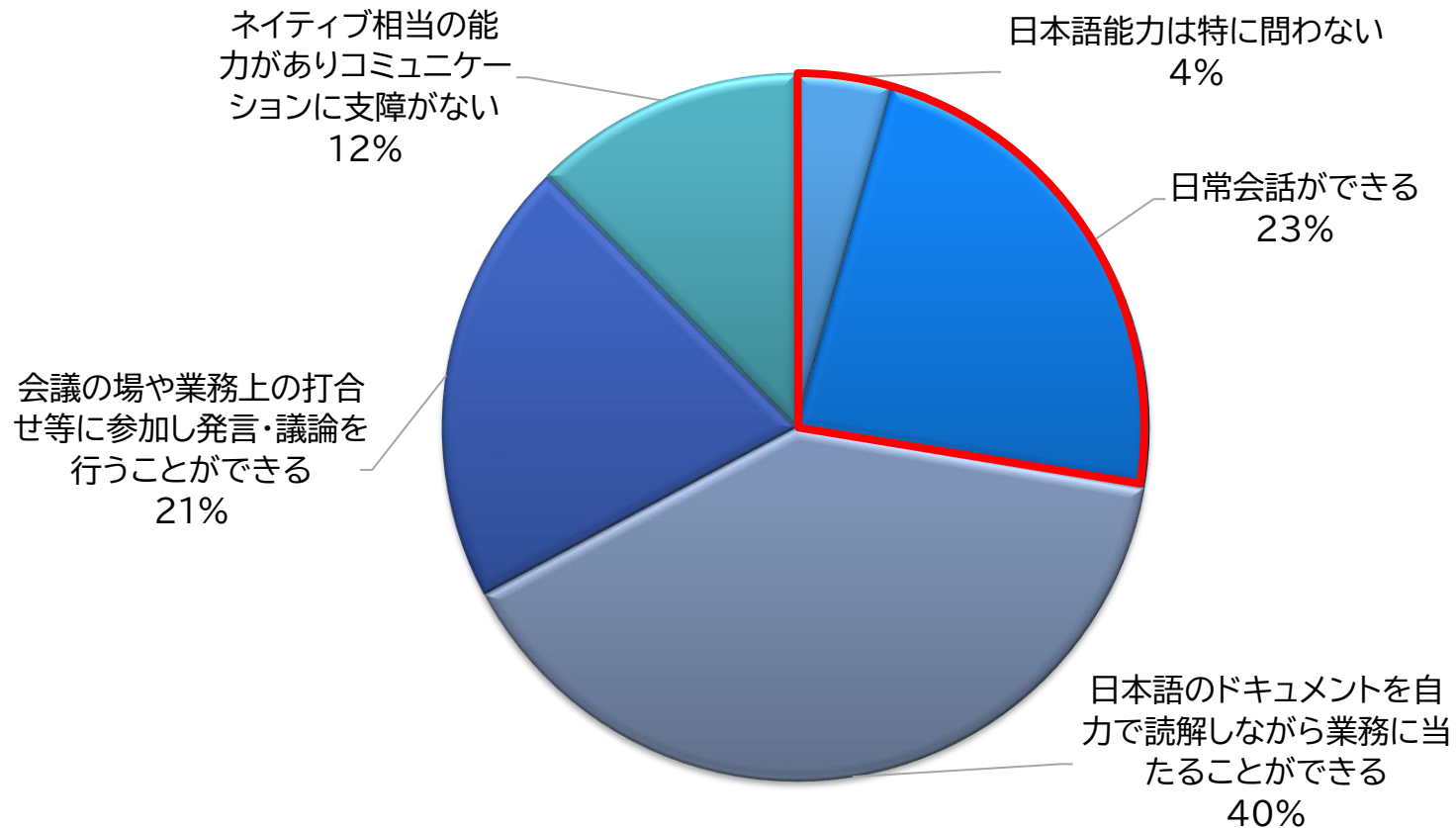
- ◆ JDに記載されている実施期間の下限で集計したところ、「2ヶ月」が約5割を占め、「2か月未満」は約4割であった。
- ◆ 実施期間の上限は「2ヶ月以上」が86%、「3ヶ月以上」でも53%となった。
- ◆ 「その他」は「本人の希望に柔軟に対応可能」等、明記されていないケースが該当。



n=137(令和7年12月末時点)

# 令和7年度 登録JDの傾向(求める日本語能力)

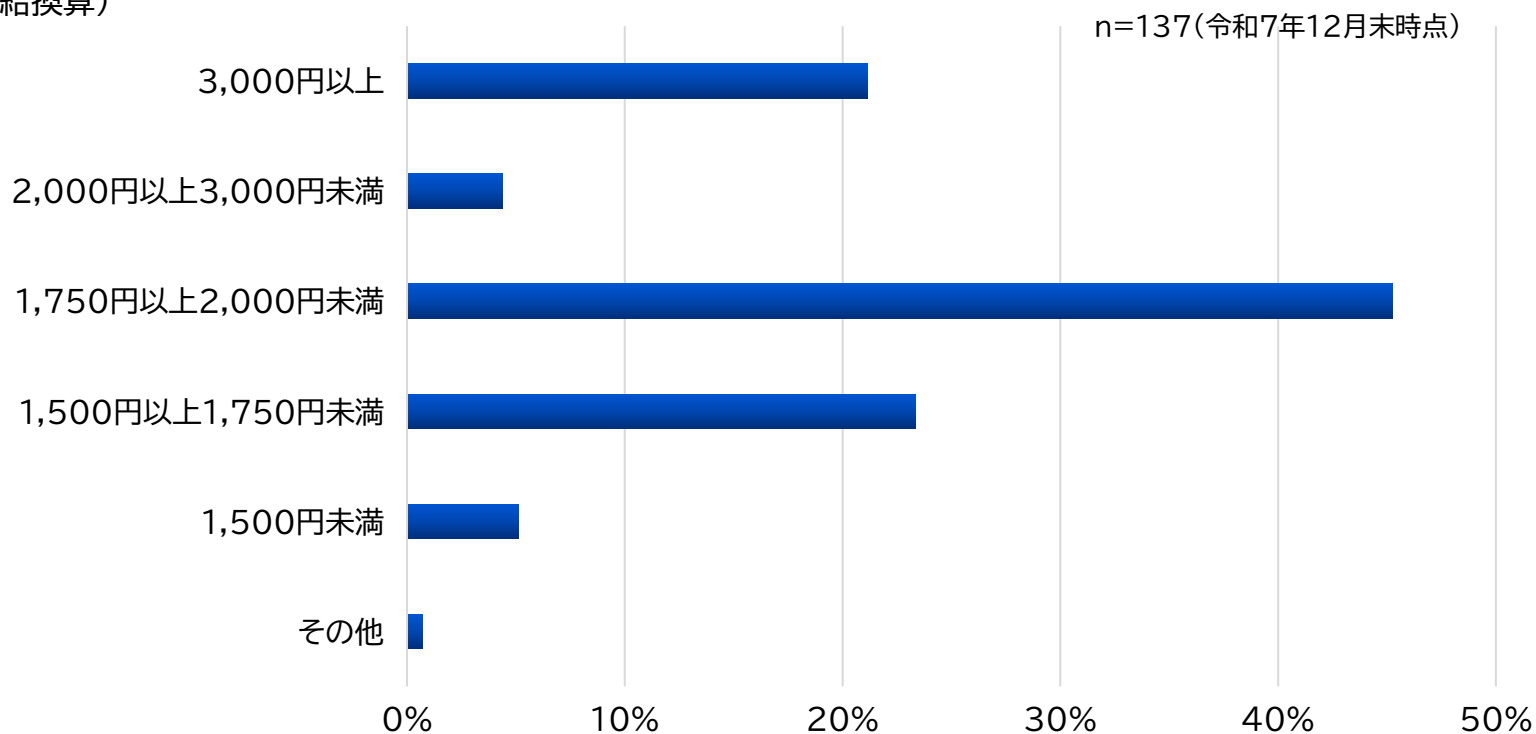
- ◆ これまでと大きな変化は見られない。
- ◆ 「日本語能力は特に問わない」「日常会話ができる」というJDが27%と、高度な日本語運用能力が必要でないJDも一定数存在している。
- ◆ なお、英語併記で内容を記述しているJDは9.5%であった。



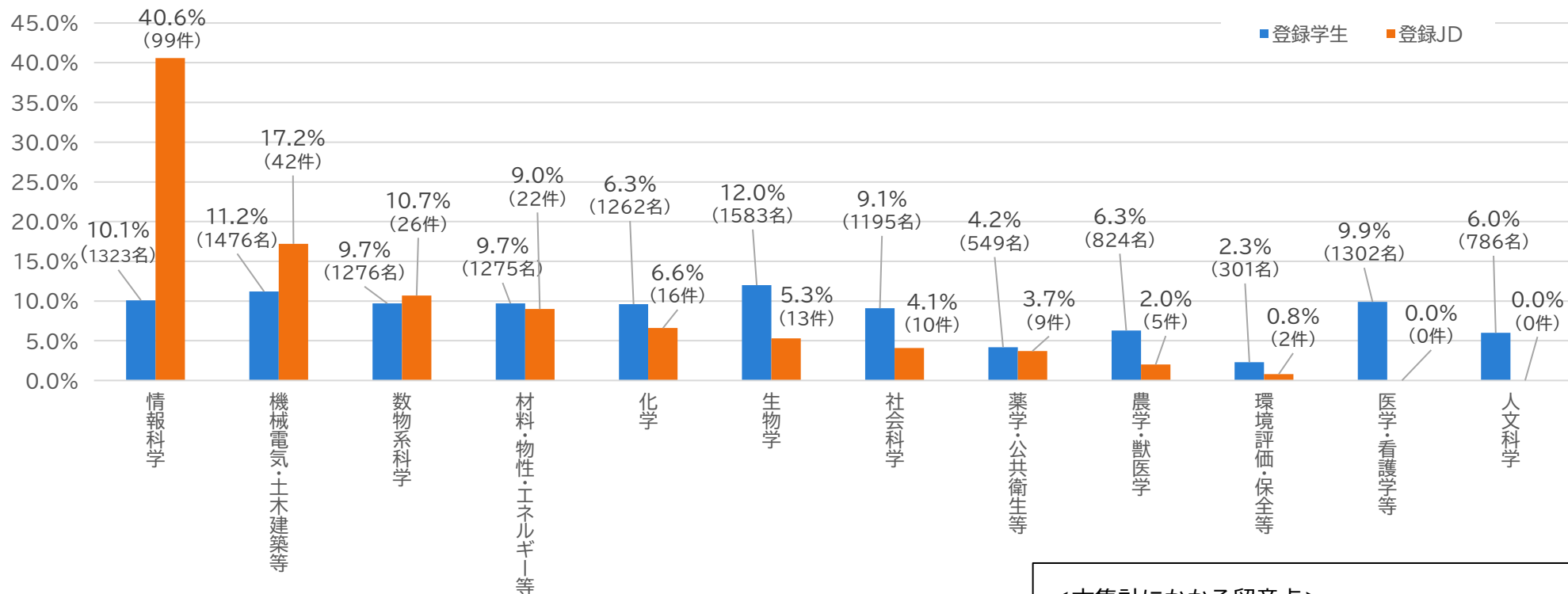
## 令和7年度 登録JDの傾向(給与水準)

- ◆ 1,750円以上2,000円未満で設定されているJDが最も多い。
- ◆ 2,000円以上の割合が増加傾向(R6:5%→R7:26%)
- ◆ 平均値は2,055円、中央値は1,870円
- ◆ 最大値は3,125円、最小値は1,163円
- ◆ 「その他」には個別に決定すると記載されたケース1件が該当。

(時給換算)



# (参考) 令和7年度 登録学生と登録JDの研究分野における需給バランス



◆ 数値(%)はそれぞれ「全登録学生に占める当該分野を選択した学生の割合」「全登録JDに占める当該分野を対象としたJDの割合」(括弧内は実数)。

◆ 研究分野は、科学研究費助成事業(日本学術振興会)の審査区分表における大区分で集計し、該当するJDの件数が多い順で整理した。

◆ 「情報科学」「機械電気・土木建築等」でJDの割合に対して学生の割合が少ない。

◆ 「化学」「生物学」「社会科学」「農学・獣医学」「環境評価・保全等」「医学・看護学等」「人文科学」ではJDが少ない。

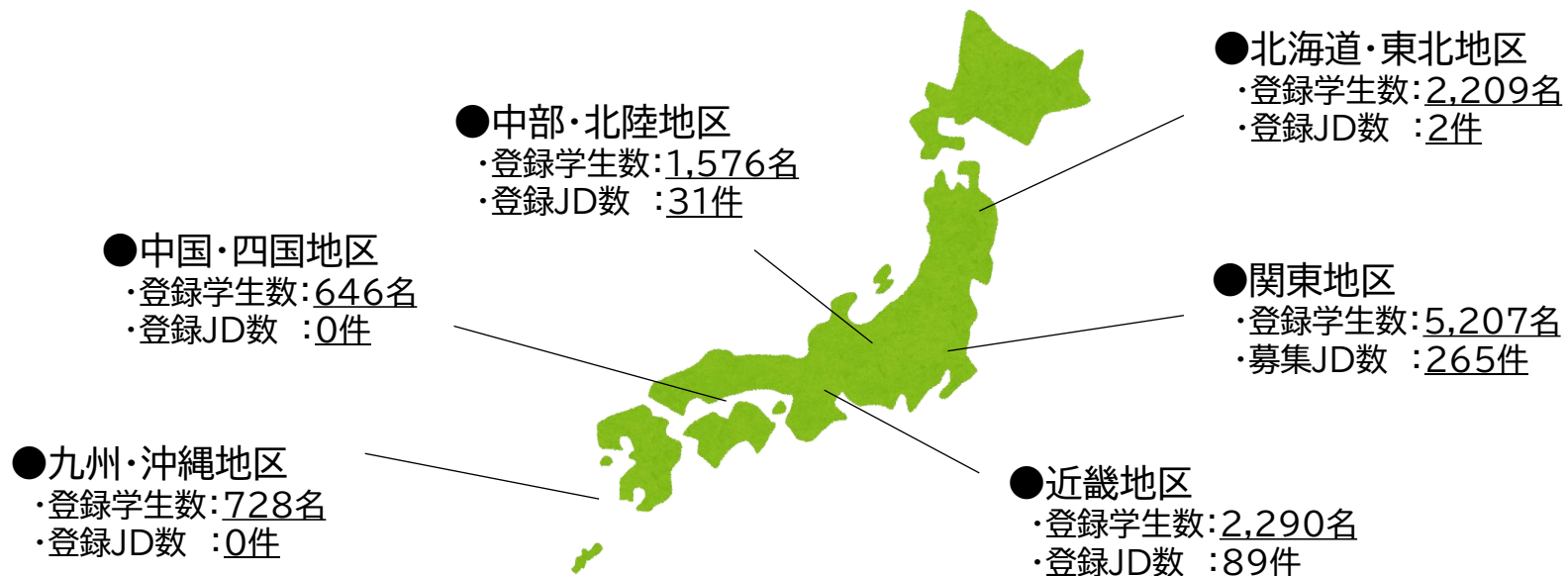
◆ 「数物系科学」「材料・物性・エネルギー等」「薬学・公共衛生等」は大きな差が見られない。

## <本集計にかかる留意点>

研究分野は、科学研究費助成事業(日本学術振興会)の審査区分表\*における64つの「中区分」の中から、3つまでの選択制としています。上表では大区分(ただし人文科学と社会科学は分割)で集計しています。(したがって、上表は登録JDの実件数とは一致しません。)

# 登録学生数と登録JDの状況(地域別)

- ◆ 登録学生を地域別にみると、関東地区が約4割、北海道・東北地区が約2割、近畿地区が約2割となっている。
- ◆ 登録JDの勤務場所を地域別にみると、令和4年～令和7年までの累計で、関東地区が約7割、近畿地区が約2割、中部北陸地区が約1割であり、中国・四国地区、九州・沖縄地区では0件となっている。なお、一部リモートで勤務可能な登録JDもある(累計189件、約6割)。
- ◆ 学生からは、研究活動との両立等のため近隣の企業等での参加やリモートでの参加を望む声も多い。



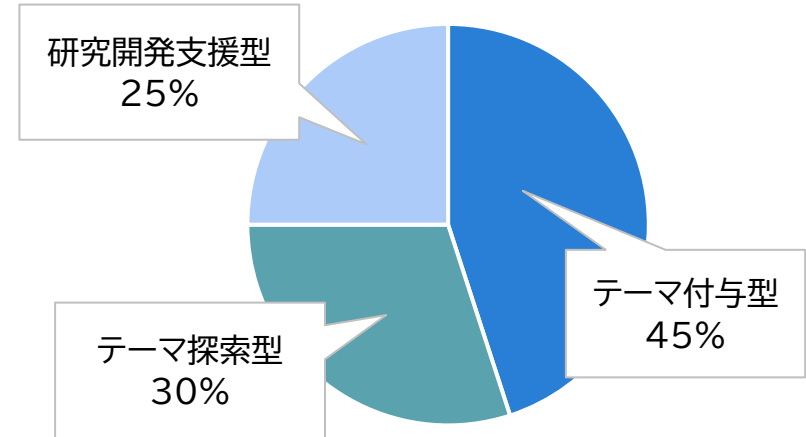
※登録学生の地域は、所属大学の在籍地域から集計(令和7年12月末時点)

※登録JDの地域は、JDに記載の勤務地として選択(複数選択可)をした都道府県をもとに集計(令和4年～令和7年)

# 令和7年度 マッチングJDの傾向(類型・期間)

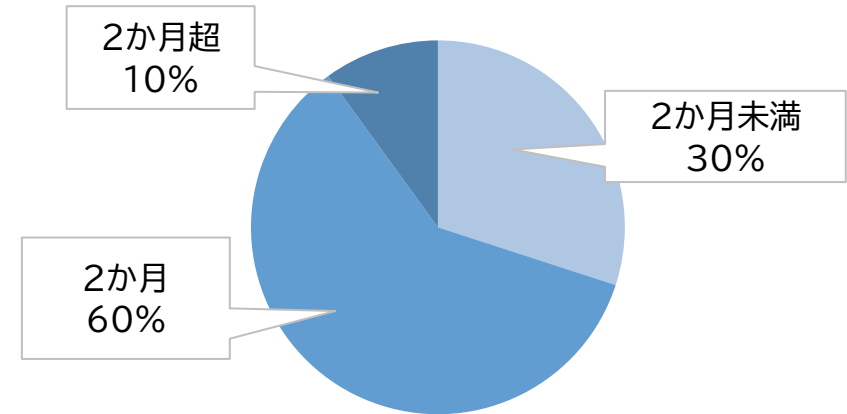
## ●マッチングJDのインターンシップ類型別割合

- ◆ 「研究開発支援型」は全体で7%なのに対して、マッチングしたJDの中では25%を占めている。
- ◆ マッチングJDのうち3件が2名を受け入れ、その他17件は1名ずつ受け入れた。



## ●マッチングJDの実施期間別割合(グラフは下限を集計)

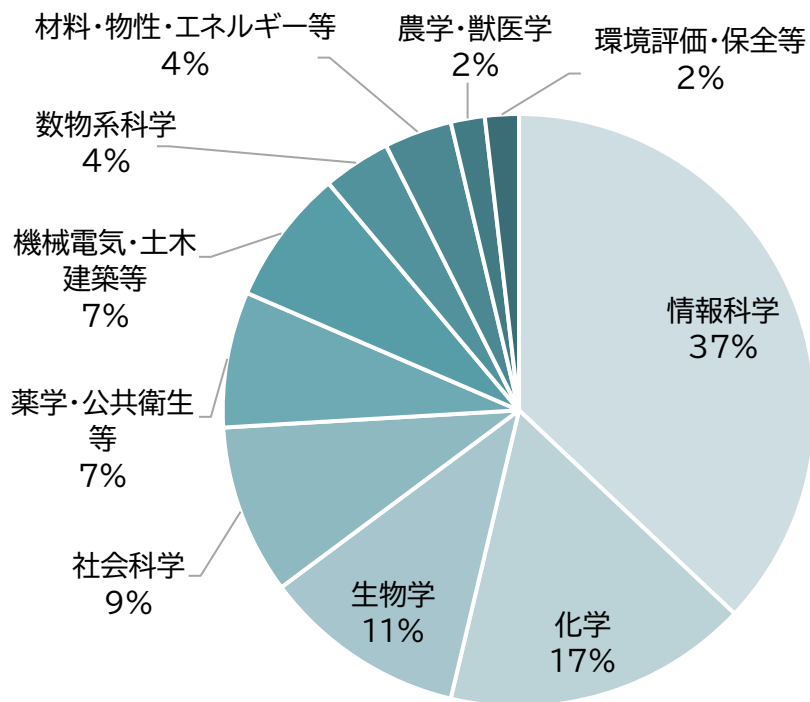
- ◆ 実施期間の下限は「2ヶ月」が6割と全体よりも多く、「2ヶ月未満」が減少。
- ◆ 上限は「2ヶ月超」と「2ヶ月月」がほぼ半数ずつ、「2ヶ月未満」は1件のみであった。



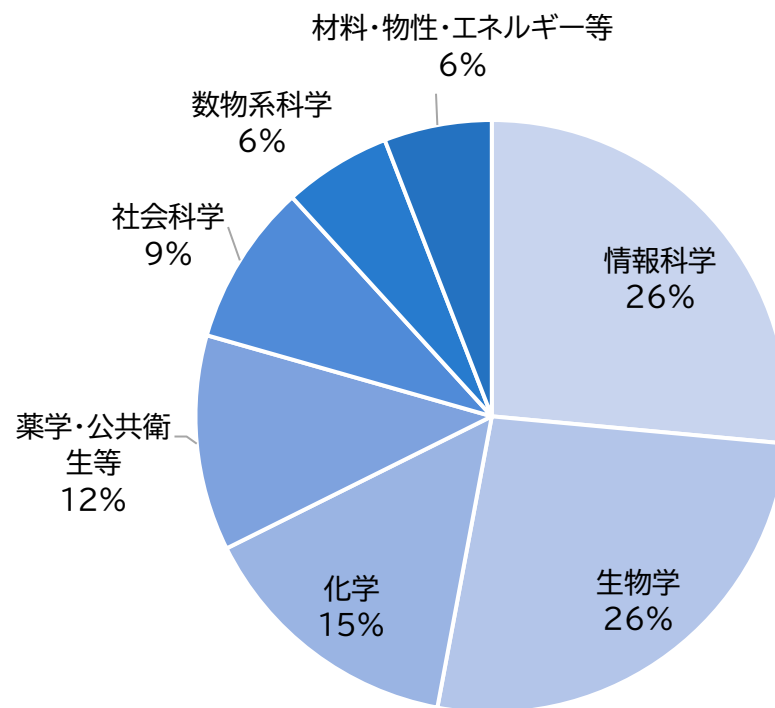
# 令和7年度 マッチングJDの傾向(研究分野)

- ◆ JDと学生の両方で「情報科学」が最も多く、上位5分野は共通しており、研究分野が一致または近いJDと学生の組み合わせとなっている。
- ◆ 「機械電気・土木建築等」「農学・獣医学」「環境評価・保全等」はJD側で設定されているものの、学生側には該当者がいなかった。

## ● マッチングJDの研究分野(大区分)

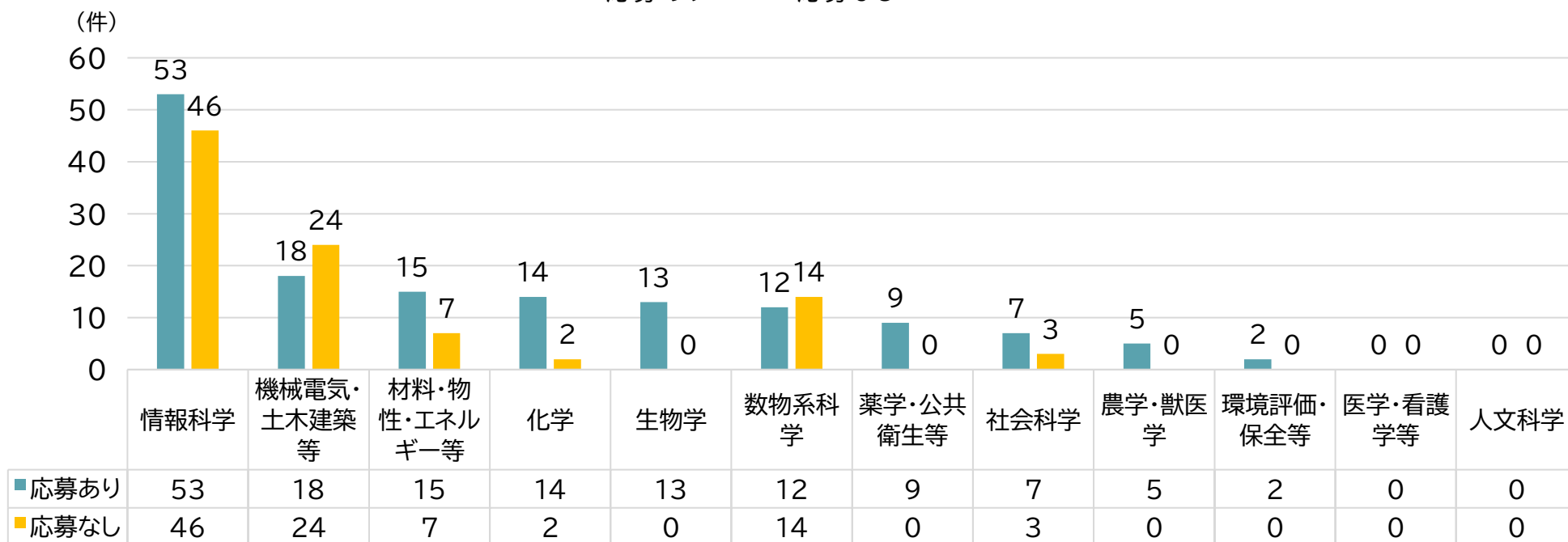
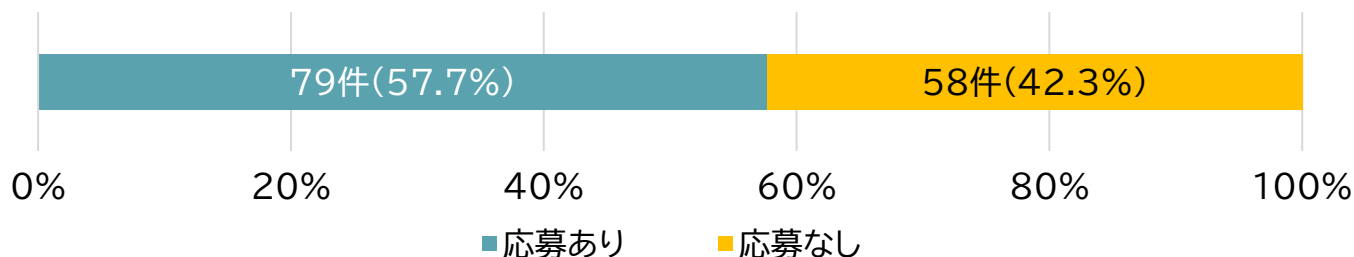


## ● マッチング学生の研究分野(大区分)



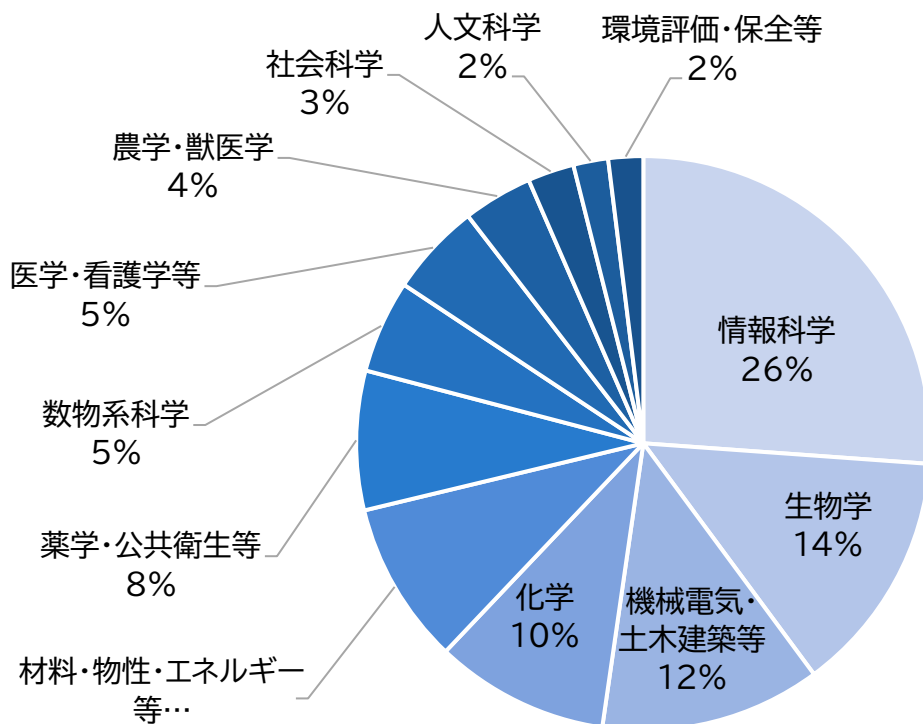
# 令和7年度 JDへの応募状況(分野毎の応募の有無)

- ◆ 令和7年度に募集されたJD(137件)のうち、「応募があったJD」が約6割と過半数であった。
- ◆ 「生物学」「薬学・公共衛生等」「農学・獣医学」「環境評価・保全等」では全てのJDに応募があった。
- ◆ 「機械電気・土木建築等」「数物系科学」のみ「応募がなかったJD」の件数が上回った。



# 令和7年度 JDへの応募状況(応募学生の研究分野)

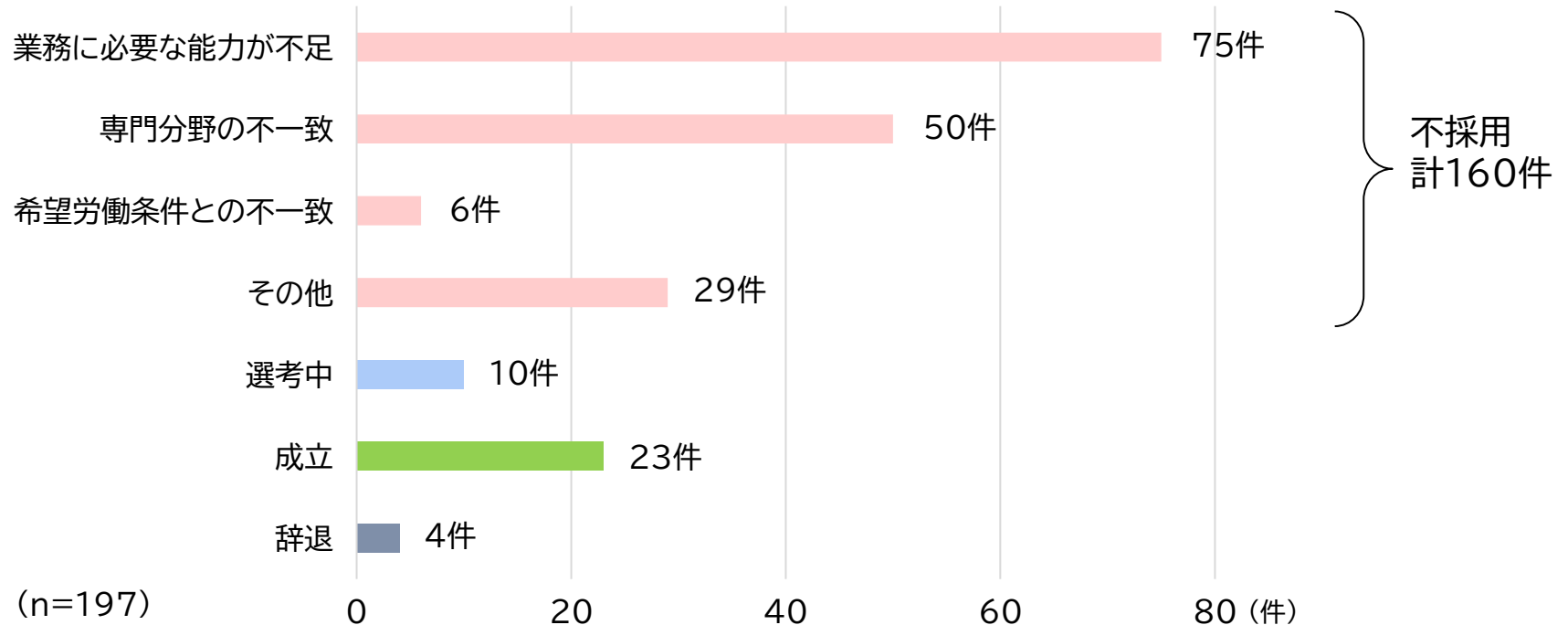
- ◆ 応募学生の研究分野としては、「情報科学」、「生物学」、「化学」の順に多い。
- ◆ マッチングには至っていないものの「機械電気・土木建築等」の学生からの応募が見られる。
- ◆ 大区分で集計すると全ての研究分野から応募学生がいる。



<本集計にかかる留意点>  
研究分野は、科学研究費助成事業(日本学術振興会)の審査区分表\*における64つの「中区分」の中から、3つまでの選択制としています。表では大区分(ただし人文科学と社会科学は分割)で集計しています。

# 令和7年度 企業の不採用(マッチング不成立)理由について

- ◆ 企業が応募者の選考結果をシステム内で登録する際、不成立の場合はその理由を選択している。
- ◆ 不成立理由の5割近くが「業務に必要な能力が不足」と昨年度(19件)と比べて増加している。
- ◆ また、「専門分野の不一致」の件数が昨年度(60件)と比べて減少している。
- ◆ 「その他」には募集時期以外や募集停止の直前で発生した応募、システム外で連絡したものが含まれている。
- ◆ 不採用の詳細な理由(自由記述)の提供は全体で5割程度に留まった。



# 専門分野に捉われないマッチングの事例(学生の専攻 × JDのプロジェクト名または概要)

数学専攻	×	量子インスパイアドコンピューティング技術 (大規模・高負荷計算を効率化するアルゴリズムの研究開発)	製造業 (機械系)
材料工学専攻	×	シングルセルレベルでの細胞活性評価方法の構築 (細胞を精密に評価分析する方法の確立、活用)	製造業 (その他)
地球惑星科学 専攻	×	接触熱抵抗の調査研究 (最近の研究動向を調査、測定可能な実験系を検討し、提案)	製造業 (機械系)
土木工学専攻	×	AI技術を用いた社会インフラ運用高度化の検討 (発電設備など社会インフラのより高度な運用方法の改良検討)	製造業 (機械系)
数学専攻	×	ソリューションビジネスをリードするデータサイエンティスト (データ解析アルゴリズム、センシングアルゴリズム企画・開発)	製造業 (その他)
生命理工学 専攻	×	オミックス解析を一步先に進めるデータサイエンスの深化 (コンピュータによる解析経験の無い方がマッチングした事例)	製造業 (その他)
分子生物学	×	開発責任者と共に挑む石膏鑄型の改良 (幅広い化学のバックグラウンドと課題発見能力が評価された事例)	製造業 (その他)

## (参考)企業での受け入れ事例

### 有限会社モールドモデル

- 所在地:山梨県都留市
- 事業:石膏鑄造による金属製品の製作
- プロジェクト:「石膏鑄造の利用範囲の拡大を目的とした石膏型の改良」
- 募集人数:1名
- 実施までのタイムライン
  - 6月:入会・募集開始  
(→6月の対面交流会でも学生へ直接打診)
  - 7月:応募獲得(2名)、受け入れ決定(2名)  
※北陸地方、東北地方の学生
  - 9~10月:インターンシップ実施(1か月程度)
- 実施形態:現地・フルタイム

#### 受け入れ担当(副社長)の声

「我々が漠然と感じていた現場の課題に、研究者ならではの専門的な視点で切り込んでくれる点を高く評価しています。単に問題を見つけるだけでなく、自ら解決策を考えて実行までしてくれるので、非常に頼りになります。ベテラン技術者と対等に議論する中で、経営陣から見えにくい「現場の本当の悩み」をあぶり出してくれるので、会社全体の改善にも本当に大きな力になると体感しました」

#### インターン学生2名からのコメント(抜粋)

##### ●全体的な感想

- 遠方へ行く必要があることは分かっていたので勤務地は気にならなかった
- 初日から熟練の技術者と話す機会があったが対等にディスカッションし、その日のうちに具体的な課題への貢献ができた
- 研究経験を応用できる場面がたくさんあり、自分が求められている実感と企業で活躍するイメージが得られた
- 異なる分野で研究職として働くことのイメージや、博士課程で培ったスキル・経験をどのように活かしていけば良いか学ぶことができ、今後の、就職活動における視野が広がりました。

##### ●得られた学び

- 異なる分野で研究をするために、どのような能力が重要になるか学ぶことができ、実践を通してさらに伸ばすことが出来た。今回の経験ではトランスファラブルスキルが重要になることを学びました。
- 会社の人たちと話すことで コミュニケーション能力が格段に上がった。

# (参考)文部科学省での受け入れ事例1

総合教育政策局・参事官(調査企画担当)付

教育学



全国学力・学習状況調査の調査結果の  
取扱いの改善に伴う分析作業

徳島大学大学院創成科学研究科創成科学専攻 博士後期課程1年

## 【研究テーマ】

探究学習に関する生徒・教員・保護者の  
認識構造の違いを明らかにする研究

## 【スキルセット】

統計分析スキル  
中学・高校理科の専修免許

## 【参加学生の声】



### ●今後のキャリアパスについて

博士課程において教員を対象とした意識調査の統計的分析を行ってきました。学力調査ほど大規模なデータではないものの、数百人規模の教員データを扱い分析を進めた経験があったため、学力調査のデータ分析に取り組む際にも抵抗なく対応することができました。さらに、学会発表や論文執筆の場面で、グラフや図表を用いた資料作成を行っていたため公表資料の作成業務において貢献できました。

### ●インターンシップに参加する前とのギャップについて

研究では好奇心や学術的な成果を追求しますが、行政は「社会にどういう意義があるか」「どんな影響を与えるか」というメディア的な役割を持っていることを実感しました。調査内容が広く社会に届くことで、社会的インパクトが大きいと感じられました。

### ●今後のキャリアパスについて

インターンシップに参加して一番大きな成果は、行政データの見方や活用方法を学べたことです。これまで研究のために統計や調査結果を扱うことはありましたが、行政が持つ大規模で体系的なデータを直接扱う経験は初めてでした。今後の研究にも応用できると感じています。

将来企業で働くことを考えても、データ分析は欠かせないので大規模なデータを取り扱った経験は大きな強みになると思います。

### ●ジョブ型研究インターンシップに参加したきっかけ

研究職のポストの空きが出るかどうかは運やタイミングに左右されるため、企業でのインターンシップに関心がありました。公開されているJDと専門分野がなかなか一致していなかったところ事務局のコーディネーターから専門分野にマッチする文部科学省のJDを紹介いただきました。当初は徳島から東京への勤務に伴う金銭的負担を懸念し、宿泊費の支給がないインターンシップは候補から外していましたが徳島大学ではSPRING学生のインターンシップ参加に際し旅費や宿泊費の支援があることを教えていただき、参加の後押しとなりました。

### ●受け入れ担当の声(参事官(調査企画担当)付・専門職)

教育学分野で統計分析を用いた研究の知見を生かし、インターンシップ期間中、全国学力・学習状況調査の調査結果公表のための分析業務で多くの成果を上げました。

アカデミックとは異なる行政の見方に、当初は戸惑いを感じていたようでしたが、次第に行政の仕事への理解を深め、自ら具体的な分析や資料作成を提案・遂行していただきました。また、職員が、学校や教育施策に効果的に役立てることを強く意識してデータに向き合い、様々な改善を図っていることを、間近に感じていただけました。

ジョブ型研究インターンシップ制度は、行政の醍醐味を体感し、参加者・受け入れ側双方にとって意義深い制度であると考えています。

# (参考)文部科学省での受け入れ事例2

## 研究開発局・海洋地球課

大気海洋物理学



海洋・極域分野の研究開発の  
推進に向けた検討

北海道大学大学院環境科学院 地球圏科学専攻  
大気海洋物理学・気候力学コース 博士後期課程1年

### 【研究テーマ】

海氷生産と南極底層水形成のメカニズムを、船上観測・係留観測・衛星データを統合的に解析することで解明する研究



### 【スキルセット】

南極地域観測隊として現地調査に参加、南極の現場観測データや衛星データの解析スキル

### 【参加学生の声】

#### ●博士課程での経験・学びの活用について

南極に関する資料作成については南極地域観測隊の経験や博士課程の専門知識を生かして調査・分析することができた。深海探査船の業務に関しては短い時間で専門用語を理解しなければいけなかったが、普段から論文を読みなれていたり、ある程度海洋に関する用語を知っていたおかげで、スムーズに業務に取り組むことができた。

短い締切の仕事が多い中で、各担当への業務の割り振りや資料チェックを通じて、業務を迅速かつ正確に進める体制の重要性を体感し、どの組織でも求められる普遍的なスキルや意識を学ぶことができた。

課内での業務のほかに、北極域研究船「みらいⅡ」の視察や管轄している海洋研究開発機構「JAMSTEC」の年次報告会への参加など多くの外部関係者と関わる経験もすることもできた。

#### ●インターンシップに参加する前とのギャップについて

実際に現場での業務を体験し、想像していたよりも業務効率化・DX化が進んでおり驚いた。関係機関との交流が多いことや外部機関からの問い合わせも多く、常に外部とのコミュニケーションが必要なことが意外だった。

#### ●今後のキャリアパスについて

大学で研究していると専門分野に没頭しがちだが、国の研究に関する予算編成過程を知ることで、自分の研究が社会課題の解決や国の成長戦略にどう貢献するかを意識することができ、国家公務員・研究者どちらを目指すにしても非常に糧になった。

#### ●受け入れ担当の声(研究開発局海洋地球課・担当官)

- ・実習への取組の様子について:南極観測隊員として派遣された経験を活かしつつ調査・研究を進めており、行政側では気づきにくい視点からの情報収集・分析が行われていた。
- ・博士課程学生に期待していたこと:広く海洋研究に携わる研究者としての知見や、南極観測隊員としての経験及び専門知識に基づき、南極における観測現場の問題点や改善点について、新しい切り口から提案してもらうことを期待していた。
- ・博士課程学生ならではの感じられた部分:通常業務や視察対応時に、日々の研究活動を通じて得られた情報収集・分析能力及び情報リテラシーの高さを感じた。
- ・実習を通しての学生の変化・成長:発表資料の作成をはじめ、各種業務において、行政の視点でのアドバイスを深く理解し適切に反映していた。実習を通して、多角的な視野を獲得していた。